教職研究
2013. 第 6 号 , 11-19

大学生の心理的な支えと自己愛的脆弱性との関連
――自己対象体験による検討――

神谷　真由美（信州大学 全学教育機構 教職教育部 講師）
髙野　恵代（広島大学大学院 教育学研究科）

1. 問題

大学生にとって,「自分探し」は避けることのできない課題である。大学生活を送るなかで，矛盾する感情に苦しんだり，場によって変わってしまう自分に悩んだりと，自分が何者であるか実感が持てず，まるで自分がばらばらになってしまったかのように感じることがある。桐山 (2010) によると，自分探しのゴールは，ばらばらの自分を，ある程度のまとまりのある 1 つの自分として自覚し，コントロールできるようになることである。これには自分は何者かという問いに正面から取り組み，論理的に考える力とともに，ばらばらの自分を 1 つのまとまりとして受け入れ抱えてくれる他者の存在が必要であるという。つまり，大学生が自分を確立していく過程では，心理的な支えとなる他者が必要となる。しかし，この心理的な支えは必ずしも他者でなければならないのだろうか。串崎 (1997, 1998) は，心理的に支えられているという感覚は，家族や友人，恋人などの現実の他者との関係から得られるだけでなく，その個人の信念や人生観，宗教観からも得られることを明らかにしている。

現実の他者との関係に限らない心理的な支えについては，精神分析家の Kohut (1971 水野他監訳 1994, 1977 本城他監訳 1995, 1984 本城他監訳 1995) が理論を展開している (小林, 2006)。Kohut によると，個人は生涯，自己を支えるために必要な体験である，自己対象体験を必要とする。この自己対象体験とは，特定の人物や対象，象徴との関係性によって生じる主観的体験である。Kohut は，鏡映自己対象体験，理想化自己対象体験，双子自己対象体験の 3 つの自己対象体験があるとした。鏡映自己対象体験は自分自身が表出した行動や感情を映し返してもらうことで自己が承認される体験，理想化自己対象体験は理想化した対象と融合することで安心感がもたらされる体験，双子自己対象体験は自己と対象の間に類似性や共通性を感じることで心理的に支えられる体験である。また Kohut は，自己，自己愛の発達について，以下のように述べている。乳児は断片的な自己の状態であるが，養育者との融合の特質が強い原始的な自己対象体験を経て，自己の凝集性が高まっていく。その後，十分な自己対象体験がありながら適量の欲求不満が与えられることにより，自己対象体験が担っていた自己を安定化させる機能を内在化していく (変容性内在化)。

それにより健康な自己愛が形成され，原始的な自己対象体験を必要とせずとも，自律的に自分の心理状態を安定させることが可能となる。一方，原始的な自己対象体験が不十分であったり，変容性内在化がうまくいかないと，自己愛の歪みや脆弱さをもたらす。それにより自己愛的な傷つきやすさが顕著となり，自分の心理状態を安定させるために，いつまでも現実の他者を求め続けることになる (上地, 2004; 中西, 1991)。以上から，大学生の心理的な支えである自己対象体験と自己愛は，密接に関連していることが分かる。

Kohut (1971 水野他監訳 1994, 1977 本城他監訳 1995, 1984 本城他監訳 1995) のいう自己対象体験を実証的に捉えようと，自己対象体験を測定する尺度がいくつか作成されている (Banai, Mikulincer, & Shaver, 2005; 小林, 2006; 緒賀, 2001; 白井, 2005, 2006)。このうち Banai et al. (2005)，緒賀 (2001)，白井 (2005, 2006) は，大学生を対象に自己対象体験と自己愛傾向の関連を検討した。しかし，これらの研究で用いられた自己愛傾向を測定する尺度は，Kohut の理論を十分に反映した尺度ではなく，一貫した結果は得られていない。自己対象体験と自己愛傾向の関連を検討する際には，Kohut の理論に基づいた自己愛傾向を測定する必要がある。

上地・宮下 (2005, 2009) は Kohut の理論をもとに，自己の脆弱さを，自己愛的脆弱性と概念化した。自己愛的脆弱性を“自己愛的欲求の表出に伴う不安や他者の反応による傷つきなどを処理し, 心理的安定を保つ力が脆弱であること”と定義した。上地・宮下 (2005) は，5 下位尺度，40 項目からなる自己愛的脆弱性尺度 (Narcissistic Vulnerability Scale; 以下, NVS) を作成した。5 下位尺度の内容は，①自己顕示抑制 (自己顕示を恥ずかしいものと感じて抑制する傾向), ②自己緩和不全 (不安や抑うつを自分で緩和する力の弱さ), ③潜在的特権意識 (自分への特別の配慮を求める傾向), ④承認・賞賛過敏性 (周囲からの承認・賞賛に対する過敏さ), ⑤目的感の希薄さ (自己を方向づける目標の希薄さ) である。その後，尺度の総項目数が多いことから，対象者の負担を考え 20 項目の NVS 短縮版 (上地・宮下, 2009) を作成した。その際，⑤目的感の希薄さは，他の 4 下位尺度がいずれも他者への反応にみられる特徴を表現しているのに対し，目的感という個人内的な内容であること，また「目的感の希薄さ」と他の 4 下位尺度の相関が非常に低いことから削除した。神谷・岡本 (2012), 神谷・岡本・髙野 (印刷中) では，この NVS 短縮版を用いてクラスタ分析を行い，大学生を自己愛的脆弱性の状態により類型化し，自己愛的脆弱性サブタイプを見出した。4 下位尺度得点全てが低い非脆弱群,「自己緩和不全」が高い自己緩和不全群，4 下位尺度得点全てが高い脆弱群,「自己顕示抑制」が高い自己顕示抑制群である。各サブタイプの特徴を Table 1 に示す。

以上から本研究の目的は，大学生の心理的な支えである自己対象体験と，自己愛的脆弱性との関連を検討することを目的とする。まず，特性としての自己愛的脆弱性と自己対象体験との関連を検討する。次に自己愛的脆弱性サブタイプにより，現在の自己対象体験の特徴を見出すことで，両者の関連を検討する。

Table 1
自己愛的脆弱性サブタイプの特徴 (神谷他, 印刷中, Table 1 を再構成)

サブタイプ	NVS 短縮版下位尺度得点 自己顕示抑制	自己緩和不全	潜在的特権意識	承認・賞賛過敏性	特徴
非脆弱群	低い	低い	低い	低い	緊張や不安を自分で緩和する能力があり, 心理的安定を保つ力がある。他者から特別な配慮を求める傾向, 承認・賞賛への過敏性, 自己表現を抑制する傾向は低い。
自己緩和不全群	低い	高い	中程度	中程度	周囲への自己表現に抵抗はない。しかし, 緊張や不安, 心理的な傷つきが生じた際に, 独りで処理することができない。
脆弱群	高い	高い	高い	高い	心理的な傷つきを自分で抱えられず, また, 周囲からの配慮を求める。しかし, 周囲の反応に過敏であり, 自己表現を抑制しやすい。
自己顕示抑制群	高い	低い	中程度	中程度	心理的な傷つきを独りで処理しようとする力はある。しかし, 周囲への自己表現後には, 自分を出しすぎたのではないかと考え, 自己表現を抑制しやすい。

注 1) NVS 短縮版下位尺度得点は, 神谷・岡本 (2012), 神谷他 (印刷中) の対象者における標準化得点からの判断である。

2. 方法

(1) 調査対象者

本調査は, 神谷他 (印刷中) の質問紙調査の際に, 併せて行った。そのため調査対象者は, 神谷他 (印刷中) と同じである。中国地方の大学生・研究生・大学院生 209 名 (男性 70 名, 女性 138 名, 不明 1 名), 平均年齢 20.18 歳, 標準偏差 1.28 歳であった。

(2) 手続き

講義時間終了後を利用した集団への実施と, 個別の依頼により実施した。どちらも無記名式の質問紙を配布し, その場で回答を依頼した。その際, 質問紙への回答は任意であること, 本研究に不参加でも教育を受ける上での不利益はないことを説明した。その上で, 質問紙への回答をもって対象者の同意を得たものとした。

(3) 調査内容

心理的な支え 小林 (2006) の自己対象体験尺度を用いた。本尺度は,「鏡映自己対象体験 (項目例: 自分がする話にはいつもたいてい興味を持って耳を傾けてくれる)」「双子自己対象体験 (項目例: まるで双子の片割れのように, 自分と同じようだと感じることがある)」「理想化自己対象体験 (項目例: 自分よりも色々なことを知っている)」の 3 下位尺度で構成される。対象者が自己対象体験を十分理解して回答できるように, 小林 (2006) と同様, 質問項目ごとに想定する人物が異なっても良いこと, 実際に会ったことがない人物でも良いこと, 人物だけでなく, 動物・言葉等どんなものでも良いことを教示した。評定

は，“そう思わない (1 点)”～“そう思う (5 点)”の 5 段階評定であり，得点が高いほどその自己対象体験が多いことを示す。全 15 項目からなる。

自己愛的脆弱性　上地・宮下 (2009) の NVS 短縮版を用いた。本尺度は，「自己顕示抑制 (項目例: 人と話した後に『あんなに自分を出すのではなかった』と後悔することがある)」「自己緩和不全 (項目例: 悩んだり落ち込んだりしたときに相談できる人が身近にいないと，私は生きていけないと思う)」「潜在的特権意識 (項目例: 他の人が私に接するときの態度が丁寧ではないので，腹が立つことがある)」「承認・賞賛過敏性 (項目例: 自分の発言や行動が他の人から良く評価されていないと，そのことが気になってしかたがない)」の 4 下位尺度で構成される。“まったくない (1 点)”～“よくある (5 点)”の 5 段階評定であり，得点が高いほどその要素が強いことを示す。全 20 項目からなる。

(4) 自己愛的脆弱性サブタイプ

調査対象者と同様，自己愛的脆弱性サブタイプも，神谷他 (印刷中) と同じである。NVS 短縮版の 4 下位尺度を用いたクラスタ分析 (Ward 法) を行い，4 下位尺度得点全てが低い非脆弱群が 82 名，「自己緩和不全」が高い自己緩和不全群が 45 名，4 下位尺度得点全てが高い脆弱群が 50 名，「自己顕示抑制」が高い自己顕示抑制群が 32 名であった。各サブタイプの，NVS 短縮版の下位尺度得点の平均値と標準偏差を Table 2 に示す。

Table 2
自己愛的脆弱性サブタイプの NVS 短縮版下位尺度得点平均値

サブタイプ (人数)	NVS 短縮版下位尺度得点平均値 (標準偏差) 自己顕示抑制	自己緩和不全	潜在的特権意識	承認・賞賛過敏性
非脆弱群 (*n*=82)	3.08 (0.67)	1.83 (0.45)	2.29 (0.60)	2.59 (0.63)
自己緩和不全群 (*n*=45)	2.90 (0.65)	3.14 (0.40)	2.15 (0.37)	2.79 (0.76)
脆弱群 (*n*=50)	3.82 (0.73)	3.25 (0.60)	3.45 (0.61)	3.84 (0.56)
自己顕示抑制群 (*n*=32)	4.24 (0.41)	2.31 (0.50)	2.29 (0.51)	3.70 (0.43)

注 1) 各下位尺度の総得点を項目数で割った数値を，下位尺度得点とした。

3. 結果

(1) 測定尺度の検討

自己対象体験尺度の全 15 項目において，天井効果・床効果の確認を行ったところ，「理想化自己対象体験」の全ての項目 (3 項目; 「自分よりも色々なことを知っている」,「自分よりも優れた能力を持っている」,「自分にできないことができるので,すごいと思う」) で，天井効果が認められた。この 3 項目については，小林 (2006) においても天井効果が認められている。親からの分離と親に代わる新たな対象の獲得が課題となる青年期 (乾, 2009) においては，理想化された対象とみなしていた親に対し，脱理想化が生じる。それにより，

親の代わりとなる仲間集団や青年期に特有の文化やアイドル，歴史上の英雄や芸術などを理想化自己対象体験の対象とする (Wolf, 1988 安村他訳 2001)。本研究は青年期にあたる大学生を対象としていることから，親への脱理想化に伴い，親の代わりとなる理想化の対象を希求する傾向が強く，理想化自己対象体験が多くあると考えられる。それにより，「理想化自己対象体験」の平均値が高まったと推測される。天井効果が認められたことにより，対象者の特性を，十分測定することができていないという問題がある。しかし，これらの項目は概念的に重要であることから，データ解析においては，「理想化自己対象体験」の 3 項目を用いることにした。各下位尺度の α 係数は「鏡映自己対象体験」α＝.79,「双子自己対象体験」α＝.78,「理想化自己対象体験」α＝.81 であり，十分な内的整合性が確認された。

NVS 短縮版の全 20 項目において，天井効果・床効果の確認を行ったが，天井効果・床効果は確認されなかった。各下位尺度の α 係数は「自己顕示抑制」α＝.83,「自己緩和不全」α＝.87,「潜在的特権意識」α＝.85,「承認・賞賛過敏性」α＝.82 であり，高い内的整合性が確認された。

(2) 自己愛的脆弱性と心理的支えとの相関

特性としての自己愛的脆弱性と心理的支えとの関連を検討するため，NVS 短縮版と自己対象体験尺度の相関係数を算出した (Table 3)。その結果，中程度以上の相関はいずれも認められなかった。弱い正の相関がみられたのは「自己顕示抑制」と「理想化自己対象体験」，「自己緩和不全」と「鏡映自己対象体験」「双子自己対象体験」,「承認・賞賛過敏性」と「理想化自己対象体験」,「総得点」と「理想化自己対象体験」であった (rs=.23~28, いずれも ps<.01)。弱い負の相関が認められたのは「自己顕示抑制」と「鏡映自己対象体験」であった (r=-.20, p<.01)。

Table 3
自己愛的脆弱性と現在の自己対象体験の相関

	NVS 短縮版				
	自己顕示抑制	自己緩和不全	潜在的特権意識	承認・賞賛過敏性	総得点
自己対象体験尺度					
鏡映自己対象体験	−.20**	.24**	.08	.02	.05
双子自己対象体験	−.14*	.28**	.10	.12	.13
理想化自己対象体験	.25**	.15*	−.02	.25**	.23**

*p<.05, **p<.01

(3) 自己愛的脆弱性サブタイプにおける心理的支えの特徴

自己愛的脆弱性サブタイプを独立変数，自己対象体験の各下位尺度得点を従属変数として 1 要因分散分析を行なった (Table 4)。その結果，自己愛的脆弱性サブタイプの主効果が「鏡映自己対象体験」(F(3, 205)=4.05, p<.01),「双子自己対象体験」(F(3, 205)=6.58, p<.01) で認められた。「理想化自己対象体験」においては，有意傾向が認められた (F(3, 205)=2.41,

p<.10)。多重比較 (Tukey 法) の結果,「鏡映自己対象体験」は，自己緩和不全群が非脆弱群と自己顕示抑制群よりも有意に高かった。「双子自己対象体験」は，自己緩和不全群が非脆弱群と自己顕示抑制群より有意に高かった。また,脆弱群は非脆弱群より有意に高かった。「理想化自己対象体験」は，自己顕示抑制群が非脆弱群より高い傾向があった。

Table 4
自己愛的脆弱性サブタイプの現在の自己対象体験の比較

	非脆弱群	自己緩和不全群	脆弱群	自己顕示抑制群	F (3, 205)	多重比較 (Tukey 法)
	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)		
鏡映自己対象体験	3.77 (0.65)	4.14 (0.69)	3.95 (0.69)	3.70 (0.64)	4.05**	非脆, 抑制 < 不全
双子自己対象体験	3.62 (0.54)	4.00 (0.55)	3.92 (0.56)	3.66 (0.51)	6.58**	非脆, 抑制<不全; 非脆<脆
理想化自己対象体験	4.43 (0.68)	4.51 (0.61)	4.62 (0.58)	4.74 (0.46)	2.41†	非脆<抑制

注 1) 各下位尺度の総得点を項目数で割った数値を，下位尺度得点とした。
注 2) 多重比較の非脆＝非脆弱群，不全＝自己緩和不全群，脆＝脆弱群，抑制＝自己顕示抑制群を示す。
**p<.01, †p<.10

4. 考察

本研究は,大学生の心理的支えと自己愛的脆弱性との関連を検討することを目的とした。NVS 短縮版と自己対象体験尺度の相関分析の結果，中程度以上の相関は認められなかった。特性としての自己愛的脆弱性と自己対象体験は，関連が弱いことが示された。

以下に，自己愛的脆弱性サブタイプの自己対象体験の特徴をあげ，自己愛的脆弱性と心理的支えとの関連を考察する。非脆弱群は,「鏡映自己対象体験」は自己緩和不全群より，「双子自己対象体験」は自己緩和不全群と脆弱群より有意に低かった。「理想化自己対象体験」は自己顕示抑制群より低い傾向があった。これより非脆弱群の大学生は，他群と比較して 3 つの自己対象体験が少ない状況にあると考えられる。Kohut (1971 水野他監訳 1994, 1977 本城他監訳 1995, 1984 本城他監訳 1995) によると，個人は生涯，自己を支えるために，自己対象体験を必要としている。しかし変容性内在化を経て，自己が発達していくに従い，直接的な自己対象体験を必要とせずとも，自律的に自己を安定化させることが可能となる。非脆弱群は自己愛的脆弱性が低く，自律的に心理的安定を維持する力を持っている。そのため多くの自己対象体験を必要としなくても，心理的安定を維持することが可能であり，自己対象体験が他群より少なかったと考えられる。

自己緩和不全群は,「鏡映自己対象体験」と「双子自己対象体験」は非脆弱群と自己顕示抑制群より有意に高かった。自己緩和不全群は他群と比較して，上記の 2 つの自己対象体験が多くある。「鏡映自己対象体験」は自らの感情を理解・共感してもらう体験,「双子自己対象体験」は類似性や共通性を感じる体験 (小林, 2006) である。この 2 つの自己対象体

験の多さは，この群の傷つきを独りで抱えることができないという自己愛的脆弱性の特徴と関連すると考えられる。自己緩和不全群の大学生は，自らの力で心理的安定を保つことが脆弱であり，他者に感情の調整を求める。そのため，他者から共感してもらう体験や，他者と共通性を感じる体験が多く必要になるであろう。

脆弱群は，「双子自己対象体験」が非脆弱群より有意に高かった。自己緩和不全群と同様，この群の傷つきを独りで抱えることができないという自己愛的脆弱性の特徴が，対象との類似性や共通性を感じる体験である「双子自己対象体験」の多さと関連していると考えられる。しかし，自己緩和不全群は非脆弱群や自己顕示抑制群よりも「鏡映自己対象体験」が有意に高かったが，脆弱群は，非脆弱群や自己顕示抑制群よりも平均値は高いものの，有意差は認められなかった。これは，この群の大学生が持つ傷つきを独りで抱えられないという特徴に加えて，承認・賞賛過敏性，自己顕示抑制，潜在的特権意識など自己愛的脆弱性の全般的な高さが関連していると考えられる。近年，自己愛傾向を誇大型自己愛傾向と過敏型自己愛傾向の 2 つの視点から捉えることが隆盛となっており，Kohut の理論で述べられている自己愛傾向は過敏型自己愛傾向といわれている (Gabbard 1994 舘監訳 1997)。そのため Kohut の理論に基づいた自己愛的脆弱性が全般的に高い脆弱群の大学生は，過敏型自己愛傾向が高い大学生ともいえる。吉井 (2007) によると，過敏型自己愛傾向者は強い対象希求を持ちつつも，過敏で傷つきやすいがゆえに，人への接近回避葛藤をもつ。このような過敏型自己愛傾向者との心理面接では，過敏型自己愛傾向者は，自己愛が傷つかないように面接者と一定の心理的距離をとることを求める。その際，心理的距離を保ちながら過敏型自己愛傾向者の不安や抵抗を和らげるためには，双子自己対象体験が重要となる (吉井, 2007)。つまり，潜在的には理想への強いこだわりを持つ過敏型自己愛傾向者にとって，面接者も自分と同様，不完全な人間と分かることは，親しみや安心感をもたらす。そのため脆弱群は，心理的安定を保つために，「双子自己対象体験」が多くあると考えられる。

自己顕示抑制群は，「鏡映自己対象体験」と「双子自己対象体験」は自己緩和不全群より有意に低く，「理想化自己対象体験」は非脆弱群より高い傾向があった。自己顕示抑制群の大学生は，自らの感情を共感してもらう体験や，共通性を感じる体験はあまりない。これは，この群の自己顕示抑制の高さと関連すると考えられる。他者に自己顕示欲求をはじめとした，自己の感情を表現することへの抵抗が強いため，これら 2 つの自己対象体験が少なくなっていると考えられる。対象との共感的な自己対象体験や，共通性を感じる自己対象体験が少ない状況において，自己顕示抑制群の自己を支えるのは理想化自己対象体験である。対象を理想化し，融合することにより，心理的安定を図っていると考えられる。しかし「鏡映自己対象体験」「双子自己対象体験」より，「理想化自己対象体験」を重視するあり方は，自己の感情や欲求，考えを軽視することにつながる可能性もある。例えば，他者から認められたいという欲求があった場合，それを他者に表現し，他者から共感

されたり，他者も同様の感情や考えを持っていると分かることで，自身の欲求が認められる体験となる。このように自己を承認されることで，自身の感情，考え，欲求などを重視し，他者に対しても自己表現を行っていくことにつながる。このような自己を承認される体験が乏しいなかで，「理想化自己対象体験」が多くなれば，理想化された対象と自己を比較し，劣等感を強め，自己の感情や欲求などを軽視し，さらに自己表現への抵抗が強まる可能性がある。

以上から，自己愛的脆弱性サブタイプにより，自己対象体験のあり方に差がみられた。自己愛的脆弱性に問題がないと思われる非脆弱群は，調査時点で全ての自己対象体験が，他群より低かった。一方，自己愛的脆弱性に何らかの課題を抱える他の3群は，それぞれ自己対象体験の種類は異なるものの，多くの自己対象体験があった。この結果は，自己愛的脆弱性を抱えた大学生は，自律的に心理的安定を維持することが困難であり，そのために心理的な支えを多く必要とすることを示している。加えて，自己愛的脆弱性の形成の背景に，変容性内在化が不十分であることが推察される。

本研究では自己対象体験尺度を用いたことで，大学生の心理的な支えがどの程度あるかという量的側面を捉えることができた。しかし，この心理的な支えがどのような内容であるかという質的側面を捉えていない。例えば，自己対象体験が少なかった大学生のなかにも，実は心理的な安定のために，一人の友人に過度に依存し，自他が融合したような原始的な自己対象体験をしている可能性がある。この場合，この大学生は量的側面のみを捉えると自己対象体験が少なくなり，自律的に心理的安定を保つことができるとみなされる可能性がある。しかし質的側面も踏まえると，自律的に心理的安定を保つ力は脆弱である。したがって今後は，心理的な支えの質的側面も含めて捉えていく必要がある。

引用文献

Banai, E., Mikulincer, M., & Shaver, P. R. (2005). Selfobject needs in Kohut's self psychology: Links with attachment, self-cohesion, affect regulation, and adjustment. *Psychoanalytic Psychology*, **22**, 224-260.

Gabbard, G. O. (1994). *Psychodynamic psychiatry in clinical practice: The DSM-Ⅳ edition*. Washington, DC: American Psychiatric Press.
(ギャバード, G. O. 舘　哲朗 (監訳) (1997). 精神力学的精神医学――その臨床実践［DSM-Ⅳ版］――　③臨床編　Ⅱ軸障害　岩崎学術出版社)

乾　吉佑 (2009). 思春期・青年期への精神分析的アプローチ――出会いと心理臨床――　遠見書房

上地雄一郎 (2004). 自己愛の障害とその形成過程　上地雄一郎・宮下一博 (編)　もろい青少年の心――自己愛の障害・発達臨床心理学的考察――　北大路書房　pp. 2-33.

上地雄一郎・宮下一博 (2005). コフートの自己心理学に基づく自己愛的脆弱性尺度の作成

パーソナリティ研究, **14**, 80-91.

上地雄一郎・宮下一博 (2009). 対人恐怖傾向の要因としての自己愛的脆弱性, 自己不一致, 自尊感情の関連性　パーソナリティ研究, **17**, 280-291.

桐山雅子 (2010). 現代の学生の心理的特徴　日本学生相談学会 50 周年記念誌編集委員会 (編)　学生相談ハンドブック　学苑社　pp. 30-34.

小林卓也 (2006). 自己対象体験の因子構造――心理的な支えという視点から――　福祉心理学研究, **3**, 64-71.

Kohut, H. (1971). *The analysis of the self.* New York: International Universities Press.
(コフート, H. 水野信義・笠原　嘉 (監訳) (1994). 自己の分析　みすず書房)

Kohut, H. (1977). *The restoration of the self.* New York: International Universities Press.
(コフート, H. 本城秀次・笠原　嘉 (監訳) (1995). 自己の修復　みすず書房)

Kohut, H. (1984). *How does analysis cure?* Chicago: The University of Chicago Press.
(コフート, H. 本城秀次・笠原　嘉 (監訳) (1995). 自己の治癒　みすず書房)

神谷真由美・岡本祐子 (2012). 青年期の自己愛的脆弱性と心理社会的課題の達成感覚との関連　心理臨床学研究, **30**, 571-576.

神谷真由美・岡本祐子・髙野恵代 (印刷中). 大学生の自己愛的脆弱性による類型化と愛着スタイルの特徴　学校メンタルヘルス.

串崎真志 (1997). こころの支えとはなにか――心理的支え試論――　大阪大学教育学年報, **2**, 197-207.

串崎真志 (1998). 心理的支えに関する研究――ソーシャル・サポート志向性, 孤独感, 個人志向性・社会志向性との関連――　大阪大学教育学年報, **3**, 43-52.

中西信男 (1991). コフートの心理療法――自己心理学的精神分析の理論と技法――　ナカニシヤ出版

緒賀郷志 (2001). 自己対象体験尺度作成に関する基礎的研究――質問項目と妥当性の検討――　岐阜大学教育学部研究報告人文科学, **50**, 125-132.

白井大介 (2005). 自己対象体験尺度作成の試み　臨床・発達心理学研究 (神戸大学総合人間科学研究科発達基礎論講座紀要), **4**, 61-68.

白井大介 (2006). 自己愛的人格の 2 つのサブタイプにおける背景要因と自己対象体験　臨床教育心理学研究 (関西学院大学), **32**, 37-41.

Wolf, E. S. (1988). *Treating the self: Elements of clinical self psychology.* New York: Guilford Press.
(ウルフ, E. S. 安村直己・角田　豊 (訳) (2001). 自己心理学入門――コフート理論の実践――　金剛出版)

吉井健治 (2007). 過敏型自己愛人格傾向の青年の事例――自己の傷つきの再体験への恐れ――　カウンセリング研究, **40**, 306-315.